松迺落

1営5
401
1

松屋藤井大人著

松乃落葉

浪華 文榮堂藏版

かきつめたる千世のかたみとなりぬへくおほせられし此松乃落葉の四巻はおのれか學びのおやなる藤井の大人松の屋ぬしかくれたまひしのちの書ともあまた見ならしぬへう思ひめくらしてそれとおけたりし物とりいたしたるはいそれ大かた人のたよりなくてし又はおほかるをおのか身にはいみしき人のなれともあまつちさへもいとももしはいさゝかつかふまつりしおほきなるまつる中えりいたしてそれゑりいたしいて言くさのそへりのしたまへるなりけり

○此書の巻のはしめはこれ神のみちの事かむなからなるまうす物をとりあつめたるはみ國まてハ神なからをいとく

おのしと思ふおもひなましバ見ん人はあやしみもやゝのみてよく
ならえてしかるとのこゝろしひらぞおのこかくだ職員
令延喜式などやうにのうれ書にも神の御事ありかくまゝれ
すぢ成もじめよかれたるれたるひるやう〱ふみもあるべし
○道歌文はゆるびみかくまるこゝろも見えるり此
すぢは大むね○ハ二のまなぶべくといふ書をかりもちてとれをし〱
たらひそしくるしくハそのすぢくのある書のちうちくに
かれらあひろハあれどもそまてゆるしといひつられざり〱
事又ハ同じすぢはあくもこゝに言みだりくいひくさやくにき
さんとしなるべくもゆるしバなるべし此まりのあるハ心あり

ゆかしとぞおもへてるすぢあらそふれそのくはしのくだちこハかゝる
ことたかへるふなん
○まきしるハ有職のゆるびはることにとまるでも見えうるハ
それすぢの書まなびをたてしてあらそふれ考へあるやうへなる
またはりはんにあらそふいさしへるをとみたまふまそのでハ
かくま此てらふとやふも心うをとるまぞるふしのじ称んみゆり
つらをいさくろかなふぞでたまへる那吏
○儒佛のうちれ見えうるハそれ道成しやかくやとひひなるて
またハあらびれそのかうぢわざしたてまなぶ人のこゝろえれとし
ゆゑをはぶかのひるあへてあらぶをいさきへんとされみ

おのれむかしより心ざしひとつにて
○師のつ○とりをしへたまへるはかくこんなるはもろくそのし
ころ身のおろかなるをもわすれゆかしいのすぢ世に行れたざ
みちのこゝろえみせんと思ひたつことはしむべきそぞまる
されバおしえてのち人にもしるこゝろえ蔵をしへそのうちも
ねがはしいまでわが身のためにはもいさゝか天の下なる
人のみえともなりぬべししかれバしてはその志たらバ
さるまじく身をも人をもとなくおもはんと思ふかひろく
をしへなさひおほきまてなる心へあまたねがはしとバ見るべき
ことにあらんとするはいまだとも、かくふるき随筆といふもの

やうにもあらずとも世のためはあしくおもひよりてはいかゞある
しなきへバかうかしくはるちからあつてとはしまぎるのし
めでたる書にはいかゞ次ぐ大むねをいふにあらん
此松の落葉のふるきはりとよりいろいろなるはかねを年經るも
うすきの色のかはらずしてときはなる言をむすびことに板に
ゑらせなるゝはあまたせまく見ん人たちのためにとのりてかくの
一巻なるへつるものなん時は文政の十とせはたとせ二とせの
いつとしの春かく申れは吉備のみちの中なる二子の里みち民此
頃はあるところに小紫の屋に旅居せる

中村孫三郎寛

松乃落葉總目録

一の巻

○大吉備津彦命と申せし御名　一のひらおもて
○兵器をもて神をまつる事　同ひらうら
○國政ハ神事をもはらせし事　二のひらおもて
○山城國ハやましろくにといひける事　四のひらおもて
○野　同ひらうら
○すゝき　五のひらおもて
○雁が絲　同ひらうら
○人をわする　女れあへる　六のひらおもて

○貫之主のかゝれたる古今集　同　ひらうら
○定家卿のかきたまへる伊勢物語　七のひらうら
○為家卿のかゝれたる百人一首の本　同　ひら
○大中臣藤井宿禰　松乃屋　八のひらうら
○吉備國にありはべりし時代　九のひらおもて
○うちは　十のひらおもて
○扇にものかく事　同　ひらうら
○かへる　かはづ　十一のひらうら
○松虫　鈴虫　十二のひらうら
○男女　十四のひらうら
○字(アザナ)　名字(ミヤウジ)　十六のひらおもて
○何右衛門何左衛門といふ事　十八のひらおもて
○神の宮人を大夫といふ事　十九のひらおもて
○大工少工　同　ひらうら
○琴　笛　二十のひらおもて
○和笛　二十一のひらおもて
○小篳篥　同　ひらうら
○さみせんの琴　同　ひら
○むかしの今様哥　二十二のひらおもて
○かゝさゐにかれたることば讀やう　二十三のひらうら

○天狗　二十四のひらおもて
○すゞめ軍して多れつさとたゝかふ事　二十七のひらおもて
○ひかり　二十九のひらおもて
○はなくその　いくさ　三十のひらうら
○みゝず　かへる　三十一のひらおもて
○ところひ　むかれ　三十二のひらおもて
○劔ハ身のまもり成る事　同　ひらうら
○白狗　三十三のひらおもて
○獅子　狛犬　三十四のひらうら
○祇園祭乃山鉾　三十八のひらうら
○京はまちのみち大路小路といひ分る事　三十九のひらおもて
○堀川東西よ流るゝ事　四十のひらおもて
○葛野河　同　ひらうら
○大堰　四十一のひらおもて
○嵯峨帝芹河行幸の事　同　ひらうら
○玉出嶋　ささの浦　四十二のひらうら
○祝園乃森　四十四のひらおもて
○筥根路　四十五のひらおもて
○哥よみ　うた人　四十六のひらうら
○古哥のあやまりをとくづくやう　四十七のひらうら

○哥詞書にしくにもがなとわかれし事　四十八のひらうら
○色紙形　四十九のひらおもて
○短籍　五十のひらおもて
合五十一箇條
二乃巻
○神の人にかくとなせる事　一のひらおもて
○神主　三のひらうら
○神社まてハさきをおくればつきき事　四のひらおもて
○神と一前二前と申せる事　五のひらうら
○神乃御使　六のひらおもて
○散米　七のひらおもて
○拝　八のひらおもて
○拍手　十のひらうら
○氏神　氏子　十五のひらおもて
○雑書にまじれる事　まへのめぐらみち　十六のひらうら
○人ばしらは昔ハ何がしぞそといひし事　十八のひらうら
○ゑのりとみそ　十九のひらおもて
○まかれ　ほひち　同　ひらうら
○雨ふらば　雪ふりよ　二十のひらおもて
○あさがほ　二十一のひらおもて

○鬼 二十三のひらおもて
○三ツみち乃教 二十八のひらおもて
○論語 三十のひらおもて
○孔子ハ湯武をゆるしたまはざりしといふまどひ 三十一のひらおもて
○信偽 三十三のひらうら
○僧ハ身のおこなひのやう昔今たがへる事 三十五のひらおもて
○ことわざのならび 三十七のひらおもて
○わのまなびはやくぢ小儒佛の道を退けんとせざる事 三十八のひらおもて
○冠字受 三十九のひらおもて
○烏帽子 四十三のひらおもて
○衣服 四十七のひらおもて
○狩衣 五十五のひらおもて
○上下 五十六のひらうら
○小袖 五十八のひらおもて
○中ゆひゆまき 五十九のひらうら
○御國人の衣きるハ左襟なりし事 六十のひらおもて
合三十二箇條
三之巻
○賀茂乃御社 一のひらおもて
○賀茂祭ハ勅使 四のひらうら

○名神明神 并 大明神　五のひらのうら
○神事には音樂をかなでし事　七のひらのうら
○星を祭る事　八のひらおもて
○齋女　九のひらおもて
○荒和祓　同　ひらのうら
○神遊巫舞　十のひらのうら
○神まつる所に木綿つけたる賢木を立る事　十一のひらのうら
○男女乃髪　十三のひらおもて
○むかしの男女玉鈴を身のかざりとせし事　十七のひらおもて
○百姓　十八のひらおもて
○奴　同　ひら
○もしほの めしうと　十九のひらおもて
○餌取　同　ひらのうら
○遊女　同　ひら
○あふ坂山のせき○ゆふつけとりの哥　二十二のひらおもて
○はちをしら　二十三のひらのうら
○菊　二十四のひらのうら
○菊にきせわた　二十七のひらのうら
○蘆手　二十八のひらのうら
○四方山　三十四のひらおもて

○哥ゆゑ　三十五のひらおもて
○うゐくろきし　同ひらうら
○哥いひおほせぬをよしとする事　三十六のひらおもて
○だふ　さく　三十七のひらおもて
○わかろけ　三十八のひらうら
○あゆ　三十九のひらうら
○高殿　たか屋　四十のひらおもて
○堤乃挪　同ひら
○伊勢物語新釋の事　同ひらうら
○湯淺元禎のかける書を見て思へるやう　四十二のひらおもて
○龍雲禪師のいへること　四十三のひらおもて
○人の家にて神部に中臣祓辭よませむ事　四十四のひらうら
○人ハ死まゐらん後にあらはも神を祭て祈るべき事　四十五のひらおもて
○四大　五行　四十六のひらうら
○母屋　庇　四十七のひらおもて
○長押（ナゲシ）　まふね　同ひらうら
○屋れうちの間　四十九のひらおもて
○障子　かくいみ　同ひら
○天井　五十のひらおもて
○むしろ　同ひらうら

○たゝみ　五十二のひくおりて
○砌　五十四のひくれう
○みだれ　五十五のひくおりて
○せきとの間　同ひくれう
○飛彈工　五十六のひくおりて
○かうら屋　同ひくれう
○あかゝ乃橋　五十七のひくれう
○文臺は筥硯乃筥　五十九のひくれう
○そうしれうる　六十一のひくおりて
○神の御名のまゝ申はとゝみとしといふ事　六十二のひくおりて

○そのゆゑびとる人はくしゆし　六十三のひくおりて

合五十三箇條

四の巻

○神の宮人乃於ことゝいふ聲を高くあつる事　一のひくおりて
○神よなてまつりのゝを祝詞はとれやうふ申は事　二のひくれう
○板立馬　馬代　四のひくおりて
○繪馬　五のひくおりて
○神乃宮人は芻械とる事　同ひくれう
○神よ字てまつるそのゝを初穂といふ事　六のひくおりて
○小忌　大忌　七のひくおりて

○春日を祭る事　同　ひとくだり
○千度祓　八のひとくありて
○穢　九のひとくありて
○鹽湯してそのみをきよむる事　十一のひとくだり
○わが大神の御饌たく竈殿の直會といふ米の事　十二のひとくありて
○あふそれにそくち　へまつる事　十四のひとくありて
○むかし人の木の枝にそのさつをはる事　同　ひとくだり
○阿曾女　十六かひとくありて
○比々奈　十七　ひとくだり
○小兒をとてはそひまし　十八のひとくありて
○あつまねやしね子ハ服うれる事　同　ひとくだり
○服衣ハ椎あらしてをあらく黒き色なる事　十九のひとくだり
○敬ひことハ名をされよ姓官位を後よいふ事　二十のひとくありて
○五位以上　二十一のひとくだり
○公家　二十二のひとくありて
○そのうふ　ためむさし　同　ひとくだり
○長上　二十三のひとくありて
○僧尼の巫術をなせる事　同　ひとくだり
○儒者の國政をしやかくやといふ事　二十五のひとくありて
○男女の名昔やうふつくハちがひとなる事　同　ひとくだり

○祖のゆづるゑをはく事　二十六のひらうら
○男手　女手　二十七のひらおもて
○かな文乃旅路の日記　同　ひらうら
○漢文ハおとこにかぎりける事　二十八のひらうら
○本　はうし　二十九のひらうら
○枕さうし　三十のひらおもて
○本はまう　三十一のひらおもて
○夾竿　鐵尺　同　ひらうら
○門松　三十二のひらうら
○錢　金銀　三十三のひらおもて
○金百匹　三十五のひらうら
○かなし　三十六のひらおもて
○ちやる　三十七のひらおもて
○かひくし　同　ひらうら
○うるて　三十八のひらおもて
○いでや　同　ひらうら
○むかし人のりのゐハおとすれるりし事　三十九のひらおもて
○哥をつくるといふ事　同　ひらうら
○記録所　領家地頭　四十のひらおもて
○莊家　名主　四十一のひらおもて

○五畿内　同　ひらうら
○貢を進といふ事　四十二のひらおもて
○えうといふ語　同　ひら
○げかう　四十三のひらおもて
○かうじみ　同　ひらうら
○印　同　ひら
○白紙　四十六のひらおもて
○袖書　同　ひら
○ふうに墨をひく事　同　ひらうら
○起請　四十七のひらおもて
○酒のむはかならず三度三獻の事　同　ひらうら
○上戸　下戸　四十八のひらうら
○うちあそび　四十九のひらおもて
○粥　五十のひらおもて
○もちひかゞみ　同　ひら
○五節供　同　ひらうら
○鹽梅　五十二のひらおもて
○かんざんといふ衣の色黒き事　同　ひらうら
○扇はすゑひろかれとさゝとする事　同　ひら
○笠　五十三のひらうら

○柳筥　五十五のひゞきありて
○時きり鐘鼓ばかり事　同　ひゞきなし
○山きり　五十六のひゞきありて
○星隕天文きぶれといへる事　同　ひゞく
○化物　五十八のひゞきありて
○幽靈　同　ひゞきなし
○屋形　六十のひゞきありて
○一家　六十一のひゞきありて
○猿樂　同　ひゞく
○形りしぞ　推志ぞ　六十二のひゞきありて
○きし絲　同　ひゞきなし
○高砂のきのく　六十三のひゞきありて
○都の清と　同　ひゞきなし
○見きるま　同　ひゞく
○今の世の武士乃兵家の書をよむありさま　六十四のひゞきありて
○驛路ノ鈴　六十六のひゞきありて
○いにしへハ死刑にをくまうさし事　六十七のひゞきありて
○その志りん人ハきらん善事ばかりをくるまあなど　同　ひゞきなし

合八十五箇條